

先週の講壇から

「迷い出た羊」

マタイによる福音書 18章 10節～14節

聖句「はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。」(18:13)

1. 《聖女伝説》 紀元5世紀頃の物語です。修道士ゾシモスが荒れ野で祈りを奉げていると、異形の女を発見します。彼女の名はマリア、12歳で享樂の都アレクサンドリアで自ら進んで娼婦となり、17年後に巡礼に混じってエルサレムに到着。そこで初めて自らの深い罪に目覚め、ヨルダン川の畔で47年間、祈りと断食の日々を過ごしていたのです。ゾシモスから聖餐を受けた後、彼女は天に召され、その葬りを、どこからともなく現われたライオンが手伝います。
2. 《個人の心》 旧約聖書「ヨシュア記」には、アカンという人物の犯した罪のためにイスラエル全体に災いが降りかかり、部族から氏族、一族を割り出して、下手人のアカンが判明するや、一家全員を石打ちの刑に処する物語があります。対して、イエスさまは姦淫の女を打ち殺そうとする人たちに向かって「あなたがたの中で罪のない者から石を投げろ」と命じられ、誰も罰する人はいなくなります。主は、石を手にした人たちを「個人」の世界に引き入れられたのです。「エジプトのマリア」が強烈なのは、個人の情熱が極限まで快樂を求め、極限まで自らに苦行を課す、どこまでも個人の意志にによって追い求める一途な姿によるのです。

《小さな者》 「迷える小羊」と言うと「迷子の子猫ちゃん」の童謡のようです。しかし、聖書には「小羊」とは書いてありませんし、誰のせいでもなく、自ら「迷い出た羊」なのです。イエスさまの仰る「小さい者」は「個人」のことではないでしょうか。かつては日本でも身分制度や大家族制度や村落共同体に縛られて、恋愛も結婚も自由には出来ませんでした。家族、氏族、村社会、国家、天皇制によって支配され、一旦「非国民」のレッテルを押されたら、個人は弾き飛ばされ、家族までもが村八分にされました。イエスさまの生きられた2千年前のユダヤは尚更でした。そんな世界の只中にありながら、それでもイエスさまは「私は集団よりも個人を尊ぶ」「迷わずにいる99匹よりも、迷ったり罪を犯したりする1匹を見ている」「それこそが天の神の御心だ」と宣言されているのです。

朝日研一朗牧師